考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.165
2017.6.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

田舎考古学人回想誌 55

「木曽郡町村会埋文担当者として（H6～10・1994～98）」

神村 透

木曽郡は平成大合併以前に11町村あった。面積は香川県に匹敵するが、町村の財政規模は小さい。こんな木曽郡にも開発計画が幾つも計画されるようになった。緊急発掘に対応する担当者は山下生六・伊深智・神村の3人で、しかも教員でしたので土日か長期休みにしか調査できなかったので、規模の大きい遺跡調査は無理でした。といって町村での担当職員の採用は財政的に困難でした。木曽郡文化財保護連絡協議会で検討して木曽郡町村会に職員を採用するように陳情した。1991年に木曽郡埋蔵文化財調査に関する会議を何回も持ち陳情し職員を町村会で採用することが決まり、92年に新谷和孝君（立正大）が入り、南木曽町職員磯村（島根大）君が出向し二人で郡下の遺跡調査に当たった。磯村君が町に帰ってからは松原和也君（富山大）が入る。私は退職するまでは現場に出かけ見学し指導もした。94年定年退職したとき話しがあって町村会に入り、現場指導に当たることになった。新谷君が辞めた後に百瀬忠幸君（東海大）が引き継いだ。百瀬君の後を青木正洋君（国大）が入る。当初は整理室もなく現場のプレハブで対応していたが、町村会の管理していた建物が空いたのでそこを埋蔵文化財室とし遺物整理・機材置き場・報告書執筆等を行い落ち着いた。

大小の幾つもの遺跡を調査する中で木曽の遺跡は他地域に比べると規模は小さいが注目される遺跡にもあたった。最初に取り組んだ上松町お宮の森裏遺跡は国道バイパスに関わる遺跡で、縄文草創期表裏縄文土器を出す住居址群で全国的にも注目された。この調査がきっかけで長野県考古学会に早期部会が会田進君部会長で発足した。お宮の森裏遺跡資料の検討会や私のところに有る押型文土器立野式土器資料の検討会もあって木曽での会合が何回もあって勉強になった。南木曽町太田垣外遺跡は圃場整備に伴う調査で縄文中期後半の住居址群を検出するが、どういうわけか花崗岩巨石群の中に花崗岩を削平したり、掘り込んだりして住居址や柱穴群があり、そのあり方が学界から注目され、さらに土坑から副葬品でコハク大珠が出て南限の出土でも注目された。この遺跡が貴重と知った田立地区住民は強い郷土愛から遺跡の一隅を公園にして立派な標柱を立て、さらに町の教育委員会に陳情し遺物を旧田立小学校の資料室に移管保存し、地区の民俗資料と一緒に展示している。緊急発掘した遺跡の公園化は木曽で唯一の例である。開田高原西野地区圃場整備は百瀬君・松原君で処理出来たが、開発計画が進む中で町村会だけでは対応出来なくなり、県埋蔵文化財センターからの派遣応援を依頼した。上松町吉野遺跡・福島町板敷野遺跡・同川合遺跡・小島遺跡・溝口遺跡・三岳村児島遺跡等がある。

私も楢川地区の江戸時代権兵衛街道の番所遺跡・木祖村五月日の江戸時代修験者の墓地十三塚遺跡・日義地区縄文中期お玉の森遺跡（平安時代灰釉皿の「大野保政所」墨書）・上松町吉野遺跡で断層等を担当して思わぬ勉強をさせてもらった。

私が退職したとき仲間が樋口・桐原さんのように祝賀会をとの話があったが断った。縄文早期部会が上松町お宮の森裏遺跡資料検討のため木曽を会場に何回も持つ中で早期部会・弥生部会・木曽考古学会の有志がどうしても先生を囲む会をとの話があり、会食を希望し94年9月木曽での早期部会後に民宿で夕食会を持った。私は手作りの『藤森栄一先生の魅力』の冊子を・実行委員青沼君が考古学・民俗関係等論文目録を作成し参加者に配布した。95名の仲間が参加してくれて嬉しかった。こんな私でも祝ってくれる県外県内からの仲間がいてくれたのが驚きでした。

退職後の5年間考古学を生かした仕事での職場に恵まれ、多くの遺跡や活動に参加できてよかったなと思う。

▲夕食会

▲参加者サイン

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■田舎考古学人回想誌 木曽郡町村会埋文担当者として　神村　透 …1
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡−女として考古学研究者として−（第18回） 岡田淳子 …2
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト（第158回） 中山誠二 …3
■考古学者の書棚 「ひょうごの遺跡をめぐる」 高瀬一嘉 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 ―女として考古学研究者として―(第18回)

岡田 淳子

⑱再びベーリング海沿岸へ

北緯61度のネルソン島は、ベーリング海沿いにある。1879年に気象調査官E･Wネルソンが、外部から犬橇で初めて訪れたので、この名がついた。それ以前はカルヤーガミウト(タモ網の村)と呼ばれていた。春先にタモ網で重要な食糧、ニシンをとっていたからと思われる。

ネルソン島は、「明治大学80周年プロジェクト」の一環として、民族班の岡 正雄先生により調査地の一つに選ばれていた。助手の蒲生正男さんと岡田宏明が、1962、67年に現地調査に参加したユピック･エスキモーの居住地である。

私は考古学と民族学を合わせて研究できる調査地として、当地域のフィールド調査に期待を寄せ、1974年から1980年まで四回現地へ足を運んだ。ネルソン島はアンカレッジから飛行機でまっすぐ西へ、ベセルで小型機に乗り換え、さらに西のベーリング海に向かって到達する。

最初の夏、滑走路や学校の敷地整備に住民たちは忙しく、私たちは許可を得てベースキャンプを設定し、住民を煩わさないように遺跡と化した廃村の測量を始めた。その廃村は、1962、67年の調査の際に住民たちが遺物を集めてきたらしい場所で、後に約400年前から200年前まで使われていた集落であると推察された。海岸の砂堤上に竪穴住居が並び、砂堤の数は、年を追って海に向かって増えていた。

1971年に「アラスカ先住民土地利用解決法(ANCSA)」が制定されて以降、発掘は禁止になったので、上から測量することと、断面を確認することしか出来なかった。しかしそこが夏に使われていた村で、冬の家は後背の崖の中に造られ、崖上には土饅頭ようのお墓が並んでいることも知られた。

その一年後に、アラスカの友人からネルソン島に「竪穴の大集落が発見された」と知らされた。滑走路造成工事で一部壊され、見つかったのだという。「もし出来たら調査してもらえないか」という依頼である。発掘できないことは分かっていたが、出来るだけのことはして見ようと約束した。

2年後ネルソン島へ赴いたとき、私たちはトヌナック地区のその遺跡を測量し、小さな試掘孔を開けて、C14測定用の炭化物を採取することが出来た。表面から確認できる竪穴は300基前後、大型の竪穴に数個の小型竪穴が付随し、グループを形成していることも認められた。また小竪穴の脇に皿状敷石の床面があって、夏期の住居であったろうと推定された。

▲流木を組んで造った1900年頃のお墓。初めて釘が使われた。

C14によれば時期は2500～3000年前、押し型文土器と打製石器が使われていた。もし発掘が可能ならば、アジア大陸との文化のつながりが分る筈と、調査不可能が残念に思われる。現地住民の生活と知識欲が向上して、何時か調査が出来るようになるまで待たなければならないであろう。

ネルソン島には20世紀末3箇所の村があった。上記遺跡のあるトヌナックの他に、そこから岬を回った南側海岸のトクソック･ベイ、小河川を遡った高台にあるナイトミウトである。彼等の生業は主に動植物採集と狩猟で、春先に氷がすべて解けるまでは大形のアゴヒゲアザラシを捕える。獲物は村全体で分かち合うが、そのときの「アザラシ祭り」は喜びに満ちていた。

氷が去ると「ニシン」がやって来る。ニシンは数の子を取り出し、植物の茎を鰓に通して吊るし、乾燥させる。次にサケを捕って干す。乾いたサケはアザラシの油脂に浸して食べるが、朝、出かけるときに半身ずつ携え、まるで昼食弁当のようであった。ニシンは、食料が得難い冬まで保存しておく。

エスキモーは、かつて植物を摂らなくても生肉を食べるからビタミンが補われると、言われていたが、春から秋にかけてかなりの植物を摂取し、一部を乾燥させて冬も食事や、薬用に使っていた。潮干狩りをして貝を食べ、鳥の卵を集め、雁を追い込み猟で大量に捕って、スープにする。このように食生活は決して生肉だけではなかった。

18世紀も後半になると、ベーリング海沿岸までヨーロッパ系の文物が入り、毛皮交易が盛んになった。毛皮獣を求めて冬は内陸に村を構えて、罠で毛皮獣を獲る。結果として夏と冬を別の場所で過ごすことになり、春から夏は海岸近くでまとまり、冬は5、6家族ずつに分散して過ごしていた。次に石油で暖房が出来るようになり、1940年代から竪穴住居を捨てて地上の家に住むようになった。石油はエンジンの利用を導入し、長距離を早く移動できる手立てにもなった。夏は舟の船外機に、冬は橇を曳くスノーモービルに、もっぱら日本の「ヤマハ」や「カワサキ」のエンジンが使われていて、懐かしさをそそられた。

もう一つ小さな村を変えたのはキリスト教の布教である。私たちが20世紀後半になっても過ごすのが楽ではなかった北緯61度の寒村に、100年も前に布教に入った宣教師たちが、いかに苦労したかが偲ばれる。しかし、宣教師がここで行った教育は、ユピック･エスキモーの目を、狭い世界から外へ向けさせるのに役立った。男性用共同住居の竪穴(カズギ)が使われなくなったのは1978年になってからであった。

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964～66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967～77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978～88年	北海道大学理学部･文学部 専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年～現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葭子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト158

アイン・ウンム・エ・スジュール(Ain Umm es-Sujur)遺跡 ～バハレーン～

中山 誠二

着陸態勢に入った飛行機の窓越しに見えたその島は、薄オレンジの単一色の街灯が暗闇を照らしていた。色とりどりのネオンが犇めく日本の都会とは異なり、私にとってそれが逆に未知なる国、無垢なる島を強く印象づけてくれた。1992年の1月11日。前日の午前中に成田を出てからカラチを経由して、ようやくバハレーンの首都マナマにある国際空港に降り立ったのは、夜10時を回っていた。

バハレーンは、アラビア湾岸に浮かぶ小さな島国である。今ではサッカーの試合でよくその名を聞くが、当時は日本人には余り馴染みのない国であった。しかし、第4次中東戦争以降、中東の経済拠点はベイルートから比較的安全なバハレーンに移り、世界の企業がこの島国に集まっていた。

当時、立教大学教授であった小西正捷隊長の基、東京国立博物館の後藤健氏、東海大学の近藤英夫氏、山梨県埋蔵文化財センターの筆者中山と、後に加わった鎌倉考古学研究所の宗臺秀明氏(現鶴見大学教授)、私の同僚である森原明廣氏をメンバーとしたバハレーンの考古学調査隊は、紀元前2千年前後の遺跡調査を目的として、1991年から1996年まで4回の調査をこの国で行った。

アラビア湾岸に浮かぶこの島は、紀元前3千年紀～2千年紀にかけて、メソポタミア文明とインダス文明を結ぶ海上交易の重要拠点として都市文明が栄えていた。アッカド王朝のサルゴン王の碑文には、「アガデの埠頭に彼はメルッハよりの船、マガンよりの船、ディルムンからの船を停泊させた」と書かれている。マガンについてはウンム・ン・ナール文化が広がったオマーン半島、メッルッハはインダス文明の広がるパキスターンからインド北西部地域、バハレーンを中心とした湾岸地域にはディルムンがあったと、今では考えられている。

この島は、ジェフレ・ビビー氏らが率いるデンマーク隊が1950年代に本格的な考古学的調査を開始し、1970年に刊行された"Looking for Dilmun"によって未知の古代文明として世界に知られる存在となった。日本では矢島文夫氏、二見史郎氏によって翻訳され、『未知の古代文明ディルムン―アラビア湾にエデンの園を求めて』として平凡社から出版されている。

バハレーン島北部の沿岸地域には、カラート・アル・バハレーン(世界文化遺産)、ディラーズテンプル、バールバールテンプルなどの城砦や神殿遺跡が点在し、島の内陸部のサールやアーリには10万基以上の古墳が累々と広がっていた。

我々が調査地に選んだのは、ジェフレ・ビビーが1954年に調査を行ったアイン・ウンム・エ・スジュール(Ain Umm es-Sujur)遺跡であった。この遺跡は、バハレーン島北西海岸部のディラーズ村に近い場所にあり、厚い砂に覆われた地表面は蟻地獄のように中央が窪み、砂の斜面には建築部材として使用されていたであろう1.5～3メートルほどの大きな石塊が数十個転がっていた。砂山の一角にはかつてデンマーク隊が調査した「聖なる井戸」がひっそり横たわっていた。井戸からは、ビビーらの調査時に2体の石製動物像とアラバスター製の石製容器が出土し、階段の踊り場から降りて行った先には円形に加工された井戸枠が発見された。

▲発掘中の2号井戸(1994.1.9)

第一次調査は、半分砂に埋まりかけていたこの井戸の遺構を再発掘することから始まった。デンマーク隊の調査から40年余り経た遺構は、階段の一部が壊れていたが、円形の井戸枠からはいまだに真水が湧き出していた。井戸のある部屋には小さなニッチ(窓)があり、そこから井戸の水を建物外に向かって流し出す暗渠施設が外側に発見された。砂に埋もれた石積みの井戸の構造物は当初地下式の構造物と考えられていたが、日本隊の調査の結果、実は独立した地上構築物であることが確認され、外壁には人の指跡が鮮明に残る漆喰が丁寧に塗られていた。

そして第二次調査では、この井戸の隣にさらにもう一つの井戸の構造物が新たに発見されたのである。この発見にはバハレーン政府の考古局も大いに色めき立ち、連日政府関係の人達が見学に訪れた。また、発見を聞きつけたジェフレ・ビビー本人がわざわざデンマークから来訪した時にはさすがに驚きが隠せなかった。2号井戸と名付けられたこの遺構の構造は、先の聖なる井戸に近いものであったが、実は周囲が厚い砂に覆われた後から作られた半地下式の構造物で、井戸枠は四角く加工してあることがわかった。L字型に折れ曲がる階段踊り場付近には、曲線的に上部が加工された石製供物台と内側をくりぬいた石製品が発見された。おそらく、神聖な井戸の儀式には欠かせない道具であったのであろう。2号井戸は、出土土器や石製品などから、紀元前3千年紀後半～2千年期前半の所産と考えられている。

当時、一地方公共団体の文化財主事に過ぎなかった私が、この海外調査に参加できたのは、小西隊長のお誘いもあったが、山梨県の埋蔵文化財センターにおられた磯貝正義初代所長、大塚初重二代目所長から快く送り出していただいた事も大きかった。

この調査を契機に私は、古代文明にとって海が果たす大きな役割や、遺跡をグローバルな視点から捉える重要性を学んだような気がする。私にとって、生涯忘れられない遺跡の一つである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは戸田英佑さんです。

考古学者の書棚

「ひょうごの遺跡をめぐる ～石野館長の考古学トーク～」

石野博信／神戸新聞総合出版センター(2012)　　高瀬　一嘉

今は発掘といえば行政が実施する発掘を指すことが多いが、かつては学校の教師や地域の研究者が手弁当で実施していた時代があった。私が大学で考古学に出会った昭和50年代は、開発に伴う「行政発掘」が発掘の主なスタイルになり始めていて、私も教育委員会が実施する発掘調査に参加する日々を過ごした。開発者との協議・調整を経て発掘を行うという、マニュアル化されたシステムの下で行われようとしていた。それでも発掘現場で先輩諸氏から、破壊される遺跡の前で重機を避けながら実施した発掘や突然発見された遺跡の緊急調査などの話をよく聞いた。私自身も大学2年の夏、昼間は「行政発掘」に参加し、夕方から今で言うボランティアで、土取りによって破壊寸前になった古墳の調査をモノが見えなくなるまで行うという経験をした。そういう発掘がまだ残っていた時代であった。発掘に至る経緯や遺跡の取扱いについての善し悪しは別にして、私にとってそこでの発掘は昼間に参加した調査より「めちゃくちゃ面白かった」のである。このままでは遺跡が葬られてしまうという緊張感、他に誰がやるのかという使命感、古代人と自分だけの1,400年の時を隔てた出会い。こういったものがない交ぜになり、完全にハマってしまった。それから35年間ずっと抜けられない。同世代の者は多かれ少なかれそんな経験をしているのではないだろうか。昔の発掘調査を実際に知り得た最後の世代なのかも知れない。

さて、この本である。これは兵庫県立考古博物館で館長（現在は名誉館長）をしておられた石野博信さん（館長と呼ばずに石野さんと呼びます）が著されたもので、考古博物館で「ハリマ大中（おおなか）トークサロン」という名称で昼休みの約15分を利用して続けてきたミニ講座が基になっている。

考古博物館でボランティアとして考古学を学び始めた人を対象に、石野さんが自らの体験に基づくテーマを選んで対話形式で講義を行ったもので、2010年に始まり館長を退かれる2015年まで88回開催された。

この本はそのダイジェスト版である。ソフトカバーのA5版、206頁の本で、表紙に学芸員が描いた「ヘタウマ」風のイラストで石野さんの似顔絵と子どもたちが描かれ、見るからに親しみやすい体裁である。構成は、縄文・弥生人の交流（10話）、銅鐸祭祀と弥生山城（6話）、邪馬台国時代のひょうごの王たち（9話）、大王の世紀(8話)、伝承と古墳(4話)の5つの大テーマの37話である。1話あたり平均4～5頁と、まさに「学び始めた者」にとってストレスのないボリュームである。短時間の講座をまとめたものであるため当たり前のことだが、これが「ちょうどいい」長さなのである。

実は、私はこの本に少しだけ関わっている。本が出版される前に石野さんの講座内容をテキスト化して博物館のメールマガジンで配信していたのである。この本はそれをさらに要約して出来上がったものである。

石野さんの話は驚くほどテキスト化しやすかった。短時間の講座だがテーマは壮大、しかも内容が簡潔で面白い。人に話をするときに物事を難しく表現してしまうのは、本当は分かっていないのだと思う。逆に、分かっているのに難しい表現をするのは人としてどうかと思う。その意味でも、テキスト化作業を通して考古学者石野博信の大きさと凄みを実感した。

そういった経緯で世に出た本であるが、編集者の手によってさらにわかりやすい内容に仕上がっている。

何回か読んでみた。3回読んで3回の発見があった。初回は素直に面白かった。戦後の考古学の創生記の逸話、例えば田能遺跡でブルドーザーに踏まれて破裂する土器の音の話、あるいは桜ヶ丘銅鐸発見の際に穴の底で銅鐸に張り付いていた柏の葉っぱの話など、その場にいた人でしか語ることが出来ない話などはドキュメンタリーとして文句なしに面白い。石野さんは風土記の話と絡めて話をされているが、これこそ、現代の「兵庫県考古学風土記」ではないかと思った。

2回目は「よくまとめられている。中学生や高校生にもよく分かる内容だ。兵庫県の考古学を学ぼうと思っている初心者にうってつけの本だ。これからの世代への道しるべになる内容だ。」と思った。

3回目は「これらのテーマはまだ解明されていない。我々へのプレゼントだと考えたらよいのではないか。博物館の特別展や研究のテーマに大きなヒントを貰った。」と思い始めた。これはいい本を出してもらったなあと思っていた。

今回この書評を書くためにもう1回読み返した。4回目である。ふっと気がついた。「これは、一般向けの本を装っているが、実は我々（学芸員あるいは考古学研究者）に突きつけられた課題ではないか」と。「お前達はこの私が提起した問題に対してどう考えているのか?」と問われているような気がした。例えれば、居合いの稽古で初心者に用意された模造刀だと思って、さんざん振り回したあと改めて見てみたら焼きの入った真剣であったという感じである。楽しそうな表紙とユーモラスな石野さんのイラストに騙されてはいけない。実は恐ろしい本だったのである。

▲ユーモラスなイラストに騙されてはいけない

それにしても、石野さんはとことん現場の人である。現地を見た人だけが思いつく発想と興味が縦横に本の中を飛び交っている。やはり考古学の根本は発掘現場にあるのだと実感させられた1冊である。

「学生よ、書を捨てよ、現場へ出よう!」でも、この本は持って行ってね。

兵庫県立考古博物館のミュージアムショップ（tel：079-437-5016）で取扱っています。

アルカ通信　No.165
発行日　2017年6月1日
企　画　角張淳一（故人）
発行所　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp